

聖書：Ⅱサムエル4：1～12

説教題：主は生きておられる

日時：2018年1月28日（夕拝）

サムエル記第一最後の章で、イスラエルの初代王サウルが死んで後、サムエル記第二に入って、サウルの家とダビデの家との戦いが長く続いています。全体的な情勢としては、3章1節に記されていたように、「ダビデはますます強くなり、サウルの家はますます弱く」なりつつあります。そんな中、3章でサウルの将軍であったアブネルが死にました。サウルの死後、その息子のイシュ・ボシェテを王に立てて、ダビデに対抗して来た人です。この時のサウルの家一番の実力者だった人です。その死はサウルの家にとって測り知れない打撃を意味します。イシュ・ボシェテはこの知らせを聞いて気力を失ってしまいます。彼だけではなく、「イスラエル人もみな、うろたえた」と4節にあります。この状況でさらにどんなことが起こったのか、がこの4章に記されています。何とここでイシュ・ボシェテに仕える二人の略奪隊の隊長バアナとレカブの兄弟が、自分たちの君主イシュ・ボシェテに見切りをつけ、彼を暗殺するという事件が起こります。彼らも自分たちサウルの家がどんどん没落していく様子を見えています。一方、ダビデの家がどんどん上昇気流に乗っています。そのダビデがやがて全イスラエルの王になることははっきりしています。そこで彼らはどうしたか。彼らはダビデの側に鞍替えしたいと考えます。そうでないと自分たちの明日はない。しかしただダビデのところに行くのでは格好がつきませんし、うまく受け入れてもらえるか分かりません。そこで彼らが出した結論は、自分たちの君主イシュ・ボシェテの暗殺ということでした！その首を持ってダビデのところに行けば、ダビデ王国確立の功労者として迎えられ、良い地位を恵まれるかもしれない。そこでこの兄弟は昼寝をしていたイシュ・ボシェテに近づき、その下腹を突いて暗殺します。そしてその首を持って一晩中アラバへの道を歩き、ダビデのところに行って来て、8節でこのように言いました。「彼らはイシュ・ボシェテの首をヘブロンでダビデのもとに持って来て、王に言った。『ご覧ください。これは、あなたのいのちを狙っていたあなたの敵、サウルの子イシュ・ボシェテの首です。主は、きょう、わが主、王のために、サウルとその子孫に復讐されたのです。』」果たしてダビデはこれにどう対応したのでしょうか。

ダビデはこの二人を受け入れませんでした。普通の人なら彼らを歓迎するかもしれませんが。良くやってくれた！あなたがたの働きに感謝する！と。事態は決定的になりました。サウルの家を将軍が死に、次いでサウルの家を王が死んだのです。サウルの家には、4 節のメフィボシェテという人が残っていますが、彼は王位継承者になるような人ではありません。ということは、ついについにダビデが王になる時がやって来た！だからその日を早くに来たらせてくれたこの二人を新政権の要職に！バアナとレカブはそのように期待したのでしょう。ところがダビデは彼らを退けます。そして「イシュ・ボシェテの血の責任をおまえたちに問う」と言って、恐るべき宣告を下したのです。

ダビデがここで思い出しているのは、1 章に出て来たアマレク人です。彼はダビデのところにやって来て、「ご覧ください。サウルは死にました」と言って、自分では良い知らせを伝えたつもりでいました。彼もこれでダビデから何らかの褒賞を受けることができるかと期待していました。しかしそれはダビデの思いとは異なっていました。ダビデは主を立てた王に自分の手を下すことを控えて来ました。さばきをなさるのは主である。その主を差し置いて、自分の勝手な判断で、主を立てた器に手を下してはならない。自分のすることは、神を立てた王を敬い、みことばに反しない限り、彼に従うことである。その立場を守って来ました。なのにアマレク人は、自分がサウルに最期のとどめを刺したと証言しました。それは神の御心にかなうものでありません。ですからそんな彼が差し出す祝福を神からのものとして喜び受け取るわけには行かない。そこでダビデは公的な立場にある者として、そのアマレク人にさばきを下したのです。

今回の二人はまして悪いとダビデは 11 節で言います。彼はイシュ・ボシェテのことを「ひとりの正しい人」と言っています。イシュ・ボシェテはサウルの子供ですが、父親の罪に関わっていたわけではありませんし、また死に値する罪を犯していたわけでもありません。彼はただ担ぎ上げられただけです。その彼をレカブとバアナは寝床の上で殺しました。その上、ダビデのところにやって来て「主がわが王のためにこのように復讐された！」などと都合の良いことを言っている。これが主が喜ぶあり方であるはずがない。そこでダビデは彼らを死刑にし、ヘブロン池のほとりで木に吊るします。そして殺されたあわれなイシュ・ボシェテの首は、ヘブロンにあるアブネルの墓へ持って行き、そこに葬ったのです。

私たちはこのようなサムエル記第二4章から何を学ぶでしょうか。それは次のことではないでしょうか。何か祝福と思われるものが差し出された時、それは主から来たものなのか、それともそうでないのかを見分けて、主からの祝福だけを受け取るということです。そしてそうでないものは拒否するということです。この二つの面について、残りの時間で考えたいと思います。ダビデはここで差し出された祝福を主からのものとして受け取ることを拒否しましたので、この否定面から考えたいと思います。先にも触れたように、普通の考えなら、イシュ・ボシェテの死の知らせはダビデにとって好都合のはずです。自分に対抗して立てられた王が死んだのです！ライバルが消えたのです！そして目の前には、この状況をもたらしてくれた二人の人が立っています。その彼らを歓迎して味方に加え、今後、重宝するという道を取ってもおかしくなかったのではないのでしょうか。しかしもしダビデがそのように歩んだら大変なことになったと思われる。イスラエルの北側諸部族の王イシュ・ボシェテが暗殺された事件は一大事件です。もしバアナとレカブをダビデが受け入れ、家来としたなら、この暗殺にダビデが関わっていたと見られてもおかしくありません。これはダビデの陰謀だった。ダビデがこうしてサウルの家に手を下した！と。これは後々の大きな問題に発展したと考えられます。しかし実際のダビデはこの二人を受け入れませんでした。むしろ彼らの行動に激しい怒りを示し、刑を執行しました。このことは将来ダビデを守ることに繋がったと考えられます。すなわちこのことによって、イシュ・ボシェテの死はダビデの陰謀によるのではないということが証しされます。ダビデはこれには関わっていない！この結果、彼が全イスラエルの王になる日に北側諸部族の理解を得られることにつながったことでしょう。

改めて考えさせられることは、私たちに差し出される祝福には2種類あるだろうということです。どちらも一見同じ祝福に見えるかもしれませんが、その内一方は神からの祝福であり、もう一方は神からの祝福でないことがあり得る。そして私たちが学ぶべきは、神からのものでない祝福はダビデのように拒否しなければならないということです。思い起こされるのはイエス様の荒野における誘惑の記事です。あの時、サタンは「私を拜めば、この世界とその栄華を全部あなたに差し上げましょう」と言いました。私に頭を下げれば、これは全部あなたのものになるのだから、さあ受け取りなさいと誘惑しました。しかしイエス様は、ぶら下げられた祝福を拒否しました。それを受け入れれば楽

です。苦しい状態から解放されます。しかしその一時的な幸いと引き換えに大変なものを失ってしまうこととなります。そこでイエス様はそれを退けられました。その姿と今日のダビデの姿はつながって来ます。私たちももらえる祝福はもらっておこう！と考えてはならない。それはサタンから出た罠かもしれません。みことばに照らして、それが主から来ているものかどうかを見分けて、もしそれが主からのものでないなら受け入れないこと。このことを私たちはこのダビデの記事から学びます。

ではなぜダビデはレカブとバアナが差し出したものを拒否できたのか、彼をそのように導いた彼の信仰とはどのようなものだったのか。その積極面について次に見て行きたいと思います。そのダビデの信仰は、レカブとバアナの言葉を聞いた後の、9節の彼の言葉に見ることができます。9節：「すると、ダビデは、ベエロテ人リモンの子レカブとその兄弟バアナに答えて言った。『私のいのちをあらゆる苦難から救い出してくださった主は生きておられる。』」ここにダビデの主に対する信仰が二つ示されています。まず彼は「私のいのちをあらゆる苦難から救い出してくださった主」と言っています。ダビデはこれまであらゆる苦難の中に置かれて来ました。サウルに命を狙われ、危機一髪の時もありました。捕まるのは時間の問題と思われた時もありました。どうしてそういう日が続いたのでしょうか。その大きな理由の一つは彼がサウルに手を下さないで来たからでしょう。サウルのいのちを取ろうと思えば取ることができたチャンスは繰り返しダビデにありました。しかし彼はそのことをしなかったため、誘惑に屈しなかったため、苦難の生活が続いたと言えます。しかし彼がここで告白していることは何でしょうか。それはそういう中でも主が私を守ってくださったということです。主がいつも私を救い出してくださったということです。苦難に次ぐ苦難の日々でしたが、ダビデが見ているのは「苦しかった～」ということより、主はそれらのあらゆる苦難から私を救い出し続けてくださったということです。その主への感謝を告白しています。私たちも自分のこれまでの歩みを振り返る時、この告白を共にできるのではないのでしょうか。色々な苦難が自分の歩みにもあったでしょう。しかし主はそれらすべてから私を守り、助け出してくださった。過去の歩みには不信仰だったこと、罪を犯したこと、そのために懲らしめを受けたこと、など自分自身が問題で、苦しかった時、悲しかった時があったかもしれません。しかし主は私を救い出してくださった。その主の恵みにより、今日このように立たせていただいている私たちです。その主の真実を思い起こして、主にこそ信頼する思い

を私たちも強くさせられるべきではないでしょうか。

そしてもう一つここでダビデが告白している信仰は「主は生きておられる」というものです。今、過去における主の導きを振り返って主を賛美しましたが、主は過去に閉じ込められているお方ではありません。私たちの神は「生きておられる」方であって、今この時もこの場所に臨在しておられます。そしてすべての状況を支配し、力強い御手をもって導いておられます。その生きておられる方に目を上げ、その方により頼む信仰に生き生きと歩んでいたのが、ダビデはその方から来たのではない祝福をきっぱり退けることができたのです。これを受け取らなくても、生きておられる主が必ず私に与えてくださるまことの祝福がある。神はそのための「時」も、またそのための「方法」も備えておられる。私はその神が与えてくださる祝福こそを待ち望むと。

私たちも色々な祝福が目の前にぶら下げられます。サタンは私たちに魅力的と思える道を提示して、「こっちの道はどうかね？これを自分のために受け取ったらどうか？」と誘惑します。一見、それは自分に幸せをもたらす道のように思えます。今の苦しい状況から一気に救い出される導きであるように思います。しかしもしそれが主から出たものでないなら、それはやがて取り返しのつかない損失を自分にもたらすことになるでしょう。私たちも主がくださるものだけ、みことばにかなうものだけを受け取る者でありたいと思います。もし目の前に差し出されたものがそうでないために、それを受け取らないなら、私たちはなお苦しみ、待つ日が続くかもしれません。しかし主はあらゆる苦難から私たちを救い出してくださる方です。その主に信頼したダビデは、いよいよ次の章で全イスラエルの王とされる祝福を受けます。私たちもその道を行きたいと思います。「主は生きておられる！」この主に信頼し、この週も主の道だけを進み、主が時満ちて導き入れてくださる祝福にこそ歩んでまいりたいと思います。